

ほまれ じんばおり げんすんだい ふくげん
“**誉の陣羽織**”原寸大で復元プロジェクト
～松井文庫所蔵「緋黒羅紗段替陣羽織」～

松井家2代興^{おきな}長が、寛永13年(1636)、將軍徳川家光より^{はいりょう}拝領した陣羽織を、当館内に秘密裏に結成した特命チームが原寸大で復元。

実物は羅紗^{らしゃ}(毛織物^{けおりもの})で作られていますが、フェルトを用い、実物同様、手縫いで^{てぬ}継ぎ^つ合わせるといふ気の遠くなる工程でしたが、美しいフォルムに仕上がりました。



↑松井興長肖像画

↑緋黒羅紗段替陣羽織

復元陣羽織→

サイズだけでなく、柄の出方も同じになるよう工夫しました。

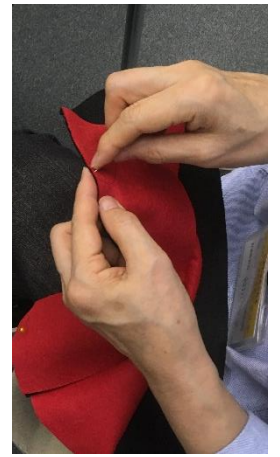
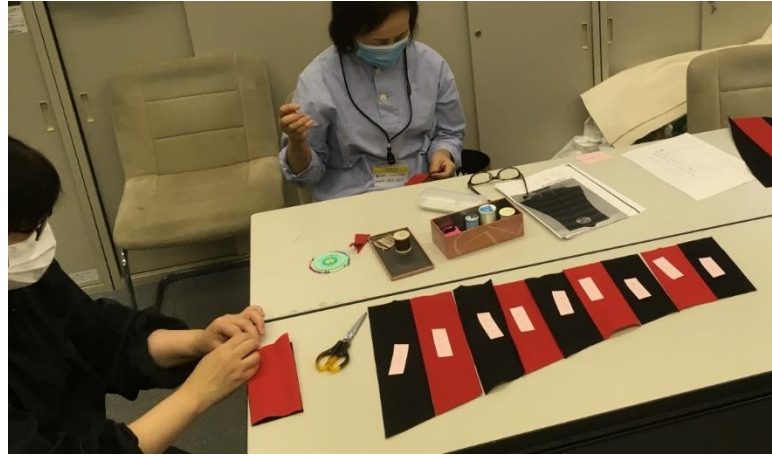
←実物の縫い目

断ち切った緋羅紗と黒羅紗の裁断面を合わせて、細かく縫い合わせてあります。

→実物の葵紋部分

金箔糸^{きんぱくいと}を赤い糸^{あかいと}で縫い留める「駒縫い^{こまぬい}」という技法で、徳川家の家紋である三葉葵紋^{みつばあおいもん}が表されています。





【陣羽織復元制作工程】

- ①実物の寸法(丈106cm、肩幅61cm、裾幅90cm)をもとに、新聞紙で型紙を作る。材料はすべて百貨で調達。
- ②フェルトを8cm幅に裁断し、実物と同じ配置に並べ、型紙にあわせて切っておく。
- ③実物と同じく、黒と赤のフェルトを**手縫いで、できるだけ細かく縫い合わせる。**
- ④すべてのパーツを縫い合わせた後、脇を縫い、襟を取り付ける。
- ⑤家紋部分は、実物は本体に「駒縫い」してあるが、復元では別布とし、ゴールドのラメ入り糸を用い、**赤い糸で「駒縫い」風に縫い留め**、最後に本体に縫いつける。



【復元制作に至ったなが〜い物語】

この陣羽織は、平成4・5年度に熊本県立美術館が実施した松井文庫所蔵武器・武具調査の際、「家康様より拝領」とマジック書きした段ボール箱から出てきました。調書を整理する中で、興長の肖像画に描かれた陣羽織と同じ柄であること、『松井家譜』に寛永13年(1636)徳川家光より「黒緋羅紗段替陣羽織」を拝領したことが記されていることがはじめて一つにつながり、自らの功績を伝える名誉の品を身に着けて描かれた肖像画であったことが明らかになりました。

染織品は、本来消耗品であり、なかなか後世に伝わりにくいものですが、将軍より拝領という名誉の証となる品は大切に保存されるため、比較的残りやすいことを考慮しても、本品のように良好な状態で、拝領者自身が着用した画像と共に伝来している例は稀有であり、まことに貴重な一品といえます。

さて、この陣羽織の黒と緋色の羅紗のつなぎ目に注目すると、非常に細かい縫い目が残っています。「一体この陣羽織は、どういう順番で縫ってあるのだろう？」というのがずっと気になっており、いつか原寸大で復元してみたいと思っていました。

令和3年4月23日、春季特別展覧会として、「八代城主松井家の武器と武具」が開幕しましたが、翌日、コロナ感染リスクレベルの引き上げにより、休館となり、展覧会場監視員の方々には、いつ開館してもいいよう事務所持機をお願いし、その間、さまざまな裏方作業に従事していただきました。そのうち、もっとも無謀なオーダーが、この陣羽織の復元制作でした。

今回の制作工程が正しいかどうかはわかりません。しかし、出来上がってみると、丈長でスリム、裾に向かって広がるラインが美しく、姿のいい陣羽織であることが再確認できました。また、実物の陣羽織が、途方もない手間をかけて、丁寧に制作されていること、それが美しい形を生み出していることを実感することができました。

監視員お三方の献身的なご協力がなければ実現できませんでした。記して感謝申し上げます。また、復元陣羽織を楽しく紹介できる場を作ってくれた本展覧会担当の林学芸員、宮原学芸員にも感謝です。(学芸員 山崎)